



【感染症だより】

～インフルエンザワクチンについて～

以前にもあんず通信でお知らせしましたが、そろそろインフルエンザワクチンを接種する季節になりましたので、簡単に説明致します。

インフルエンザワクチンは、一般的に毎年 10 月から 12 月にかけて受けます。生後 6 ヶ月から接種可能で、12 歳までの方は二回接種、13 歳以上の方は 1 回接種です。二回の接種間隔は、規定では 2-4 週間となっていますが、4 週間間隔で行うと抗体の上昇が最も良いと言われています。接種後は 2 週間程度で効果が出始め、予防効果は 4-5 ヶ月持続すると言われています。

インフルエンザワクチンを行う目的は、毎年 1～2 月に流行するインフルエンザの重症化予防のためです。重症化というのは、インフルエンザ脳炎のような、死亡したり後遺症を残すほどの重いインフルエンザのことです。ワクチンを接種しても、発熱や関節痛が数日認められるような通常のインフルエンザにかかってしまうことはしばしばあります。というのは、注射によって作られる免疫が IgG という体の血液中で活躍する抗体だからです。欧米で行われている鼻腔噴霧式のインフルエンザワクチンでは、鼻粘膜など体の入り口で活躍する IgA という抗体も産生されるため、罹りにくくなるうえに、重症化予防効果もあります。こちらは、国内ではまだ認可されていませんが、個人輸入で接種を行っている医療機関もあります。繰り返しになりますが、一般的に行われているインフルエンザワクチン注射をお勧めする理由は、重症化を予防するためです。

また、0 歳児の接種については 6 ヶ月齢以上であれば接種可能ですが、この時期は免疫機能が未熟であるため、抗体が上がりにくいと言われています。当院では、インフルエンザワクチンについては 1 歳以上になってからの接種をお勧めしています。0 歳の子に接種するワクチン 2 回分を、例えばご両親に 1 本ずつ接種して、その子に移さないための予防をお勧めしています。

表：9月しみず小児科・内科クリニックで診断された流行性の感染症

	感染症	患者数
1	ヘルパンギーナ	31
2	胃腸炎	30
3	RSウイルス	27
4	手足口病	17
5	水ぼうそう	14
6	突発性発疹	10
7	肺炎	8
8	溶連菌	5
9	おたふくかぜ	3

文責： 清水マリ子

